

心惹かれて始めた読書

はやの けんた
早野 健太

(理工学部専任講師)

正直なところ、私は小学生のとき「読書」という言葉にあまり良い印象を抱いていなかった。本といえば少年漫画しか読まず、新聞や小説は学校で課されない限り手に取らない（文字だけでなく絵もある漫画の方がはるかに読みやすいのに、なぜ好き好んで小説を読むのだろうか、と思っていた）。国語はもちろん嫌いな科目で成績もあまりよくない。学校の行事などで仕方なく図書館に行けば、退屈になって騒ぎすぎて怒られる。そんな小学生だった。

中学生になってもそのような読書に対する姿勢は変わらなかった。相変わらず活字に触れず、国語の成績も悪い（そのせいで進路を選ぶときに苦汁を嘗めることとなった）。当時を振り返ると国語だけでなく数学もあまりできなかったが（試験で出てきた2次方程式の簡単な文章題を解けなかった覚えがある）、もしかすると数学の問題ではなく読解力が足りていなかったことが原因だったのかもしれない……。

私の「読書」に対する考え方にはっきりとした変化が訪れたのは高校2年のころである。現代文の授業で夏目漱石の「こゝろ」が教材として取り上げられたのである。当時の私の頭の中では「現代文＝休憩時間」という等式が成り立っていたので、このときも「こゝろ」についての授業はほとんど右から左に聞き流していたはずである。少なくとも先生がその当時の授業で何を話していたか全く覚えていない。しかし話している様子だけは見ていたのだろうか、あるいは友人たちの会話で話題になったのだろうか、当時の先生が「こゝろ」について授業をする際（先生自身思い入れがあったのであろうか）物凄く楽しそうに語っていたという記憶だけはあつた。「それほど人を熱くさせるのであればそれなりに面白いのだろう、一度は読んでみようかな」と思い、最初は疑い半分で手に取ってみたのだが、気づけば他の授業中に先生の話も聞かずに読み耽るほど夢中になっていた。

文学に関してはまったくの素人の私が有名作品である「こゝろ」について熱く語る、という厚顔無恥な真似はしたくないので、当時の感想

には触れないことにするが（もし読んだことがないのであれば、騙されたと思ってぜひ一度手に取ってみてほしい）、とにかくこのころから自ら進んで小説を読むようになった。またこれまでに抱いていた、近代文学は古臭くてつまらないという印象もこのとき取り除かれた（とはいえなぜかこれまで「こゝろ」以外の近代文学はおろか、夏目漱石の作品にすら触れたことがないのだが……今度読んでみようと思う）。中学生のころは教科書に載っているような文章題も満足に解けなかった私が、今こうして曲がりなりにも数学者として生きていくことができているのも、ひょっとするとこのとき読書に目覚めたおかげなのかもしれない。もしそうだとすると、当時私（あるいは私の友人）の前で「こゝろ」について熱く語ってくれた国語の先生には感謝しなければならない。

このようにしてかつては忌み嫌っていた読書を、今では空いた時間を見つけては行うようになったのであるが、一般に、過去の経験などから悪い印象を抱いているものに興味を持つことはまれであり、そのためには多少なりとも外的要因が必要なのだろう。実際もし当時の国語の先生が心を込めず退屈そうに「こゝろ」の話をしていたら、おそらく私も今ほど積極的に本を読むことはなかっただろう。

さてここまで自分の読書への向き合い方を振り返ったところで、自分も反省しなければ、と思いがたつてくる。多くの人が過去の経験から悪い印象を抱いているもの、そう、私の専門分野でもある「数学」である。子供の頃から数学が好きだった私ですら数学には苦しめられたことがあるのだから、大学入学の時点で既に数学に嫌気が差している学生が多いことは想像に難くない。そのような学生に（かつて私が読書に興味を持ったように）少しでも数学に目を向けてもらえるよう、教鞭を執る際にはできるだけ楽しそうに数学の話をするよう心掛けたい。そしていつか私の講義を受けた学生が、（たとえ内容は覚えていなくても）楽しそうに話していたな、と思いついてくれることを願う。